



国指定重要文化財旧済生館本館

郷土館だより

No.98

令和 6. 3. 31 発行

〒990-0826 山形市霞城町1番1号
山形市郷土館 TEL/FAX 023(644)0253
URL <https://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp/bunkasports/bunkazai/1006705/1008027.html>

明治期に大流行したコレラの防疫対策に貢献したローレツ博士の先駆的業績－「虎列刺病新誌」の刊行を中心に－

帝京大学 医真菌研究センター
名誉教授 山口 英世

郷土館とゆかりの深いローレツ博士

郷土館の前庭に立派なブロンズレリーフの像が立っていることからもお分りのように、ローレツ(Albrecht von Roretz)博士は、済生館とはきわめてゆかりの深いオーストリア人の医師である。博士は明治7年(1874年)に来日した後、医学教育の責任者として名古屋市の愛知県公立病院兼医学校(名古屋大学医学部の前身)、金沢市の金沢医学校(金沢大学医学部の前身)、そして最後に山形市の公立病院・医学校であった済生館に順次招かれた。博士は、いずれの地においてもドイツ医学の導入に尽力するとともに、地域の医療や公衆衛生の面でも大きな功績をあげた。

日本を襲ったコレラパンデミック

有史以来わが国は、古くは天然痘から昨今の新型コロナウイルス感染症にいたるまで、様々な感染症の世界的大流行(パンデミック)に襲われてきた。明治期のそれはコレラであり、しかも頻発した。ローレツ博士が名古屋に赴任した明治9年(1876年)、第4次コレラパンデミックはすでに日本へも上陸し、国内では流行の嵐が吹き

荒れていた。この時の流行がいかに甚大な被害をもたらしたかは、翌年に届出が制度化されたコレラ患者とその死者の年次統計からもうかがい知ることができる。それによると、明治10年の時点での全国の患者数は13,816人、死者数は8,027人を算える。2年後の明治12年には明治期最大の流行が起こり、全国の患者と死者の数はそれぞれ162,637人、105,786人にもものぼるといふ大惨事となった。患者数の多さもさることながら、驚くべきは、60%前後にもものぼる致死率である。「死のやまい」と怖がられたのは無理もない。コレラの流行がこれほど深刻化した大きな背景要因としては、コレラの病因がまったく不明であり、そのために適切な診療対策や予防対策がとれなかったことがあげられる。

コレラ防疫に貢献したローレツ博士

衛生学に精通したローレツ博士が、名古屋市の医学校への着任早々、コレラ防疫対策の先頭に立たされたことは言うまでもない。博士は医学校内外で教育講演活動を行うのみならず、「汚水排導法」を県に建議するなど、感染源となる飲料水の汚

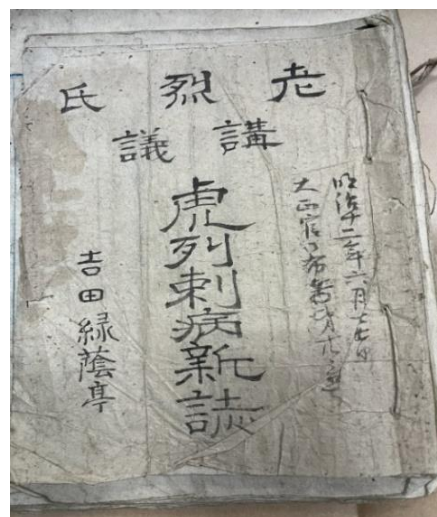
染防止対策にも熱心に取り組んだことが知られている。このようにローレツ博士は、教育と公衆衛生実務の両面でコレラの防疫に貢献した。

この時の講義をもとに著したのが明治13年(1880年)に刊行された「老烈氏講義 虎列刺病新誌」(写真参照)にほかならない。ちなみに老烈はローレツの当て字、虎列刺病は江戸時代から使われてきたコレラの和名である。今もコレラの古典として名高い本書は、虎列刺病論と題する前文と、それに続く起因及蔓延、徴候、治療及豫後の3章からなる35頁ほどの小冊子ながら、コレラの防疫に必要な事項を網羅しながらも、いずれの内容も論理的でしかも実用的であり、簡にして要を得た記述の論旨は明解である。

本書がなぜこれほど優れているか、それを解く鍵は、第1章にみられる次の記述にある。「凡ソ虎列刺病、起因タル其毒即顕微鏡上ニ見ル處、一種ノ寄生物是ナリ」。この文章は、コレラは顕微鏡でなければ見えないごく小さな寄生性生物、すなわち今でいう微生物(細菌や真菌)に起因する感染症であることを明確に述べている。この認識があったればこそ、博士は本書を論理的で明確なものに仕上げることができたに違いない。

博士がこのように時代を超えた驚くべき認識を持ち得たのはいかにも奇異であるとして、以前からコレラの専門家の間では議論の的となっていた。なぜなら病原細菌学の祖といわれるドイツのロベルト・コッホがコレラ菌を発見したのは1884年のことで、「虎列刺病新誌」刊行の3年も後だったからである。この興味深い謎は今でも未解決のまま残されている。

それはさておき、本書の前文は、「人民ニ在リテハ何ニ由テ此病ヲ豫防スルヤ殊ニ醫師タル者ハ左、三件(本書の第1章から第3章まで、つまり全体を指す)ヲ了解セズンバアラズ」との文章で括られている。



「虎列刺病新誌」の表紙(名古屋大学総合図書館医学部分館の許可を得て掲載)

全ての医師が本書の内容を熟知することが必要不可欠と説くこの一文からは、コレラ防疫に対するローレツ博士の強い意気込みが感じられる。本書は当時としては珍しく大量印刷が可能な活版印刷本としてつくられた。どれほど広く頒布されたか正確な記録は残されていないが、おそらく名古屋地域を中心として数多くの医師や防疫関係者の手にわたり、防疫業務の有用な手引書として使われたと推測される。

広く知られるべきローレツ博士の業績

日本のコレラに関する医史学書をいくら丹念に調べても、コレラが大流行したこの時期にあってローレツ博士ほどその防疫活動に尽力し、多くの業績をあげた人物はほかに見当たらない。残念ながら、感染症分野における博士の功績はこれまでごく限られた研究者の間でしか語られてこなかった。今後、「虎列刺病新誌」の刊行をはじめとするローレツ博士の業績について、より正当な評価がなされることを心から願っている。

筆を擱くにあたり、有益な情報を賜ったウイーン在住のローレツ博士研究者 茶野節子氏ならびに名古屋時代のローレツ博士の訳官をつとめた田野俊貞医師の玄孫 田野俊平先生に深く感謝申し上げます。

令和5年度の新指定文化財

山形市では令和5年7月14日付で、1件の文化財を山形市指定文化財として指定しました。指定した文化財についてご紹介します。

「山寺立石寺奥之院の大灯籠」

(やまでらりっしゃくじおくのいんのおおとうろう)

- 【分類】有形民俗文化財
- 【員数】1基
- 【材質】銅
- 【寸法】全高491cm 最下段の幅152cm
- 【制作年代】明治28年(1895年)
- 【所有者】宗教法人 立石寺
- 【所在地】山形市大字山寺

明治28年(1895)8月、山形市銅町の鋳物師小野田才助(おのださいすけ)[弘化3年(1846)生～大正4年(1915)没]により造立された大灯籠です。

七層構造で、細かな形態にもかかわらず非常に肉薄で、高い技術で鋳造されています。明治時代には溶接技術がなかったため、層同士を溶接でつなぐのではなく、凸凹を組み合わせる構造になっています。



また、大灯籠の基底部には発願主や寄付人の名が刻まれています。それによると、立石寺住職壬生優田(みぶゆうでん)が発願主となり、塔頭寺院である中性院、華蔵院、性相院、金乗院が事務総代を務めて造立への基金が集められたこと、また寄付人は、当時の山寺村や山形市のほか、北は最上郡豊里村(鮭川村)、南は東置賜郡赤湯村(南陽市)、西置賜郡十王村(白鷹町)まで、広範囲に及んでいることが分かりました。

大灯籠が奉納された立石寺奥の院は江戸時代、庶民信仰の地として広く知られており、『山形棚佐賀志』や『乱補(けいほ)出羽国風土略記』などにも奥の院の庶民信仰を伝える記述がみられます。大灯籠は、多くの先祖の霊(祖霊)の集まる目印として、また先祖の霊に捧げる燈明として、最もふさわしい庶民信仰の場、奥の院に奉納されたものと推測されます。

明治時代に入っても山寺立石寺が広く庶民信仰の地であったことを示す貴重な資料であることから、「山寺立石寺奥之院の大灯籠」を山形市の有形民俗文化財に指定しました。

令和5年度 郷土館の事業等

1 展示活動

令和5年度は次の企画展を行いました。

- (1) 山形市郷土館・郷土資料収蔵所
新収蔵品展～山形藩水野氏を読む～
(7/15～8/31)

令和4年度に、山形市郷土館及び郷土資料収蔵所に寄贈された水野家文書などの新収蔵品を展示しました。

- (2) 「やまがた秋の芸術祭」
山形市郷土館秋季企画展
東北芸術工科大学ルネサンス絵画研究会
×山形市郷土館 連携展覧会

「擬洋風ルネサンス」(10/23～11/30)
東北芸術工科大学ルネサンス絵画研究会と山形市郷土館がコラボレーションした絵画の展覧会。アーティスト達が、擬洋風建築の傑作である旧済生館本館や、所蔵する医学資料に着想を得た作品を展示しました。

- (3) 「古写真で辿る山形」
～写真家菊地新学の見た世界～
(12/5～1/25)

郷土館で所蔵する菊地新学の写真全40点を3期に分けて公開しました。

- (4) 山形市文化財成果展 (1/21～2/19)
令和4年度に実施した発掘調査の成果や新指定文化財等に関するパネル展示、日本日本遺産「山寺と紅花」を紹介する展示を行いました。

2 イベント

- 郷土館ナイトミュージアム
(4/8・9、4/15・16、8/25、11/3、2/9)
開館時間を延長し、重要文化財「旧済生館本館」三層楼の3階・4階の灯りをつけて、闇夜に浮かび上がるステンドグラスなどの幻想的な雰囲気由来館者を迎えました。展示資料の見学や、建物の写真撮影などを多くの方にお楽しみいただきました。
令和5年度は四季の移り変わりにより姿を変える郷土館を市民に楽しんでいただくため、春・夏・秋・冬の4回開催しました。

- 旧済生館本館3・4階特別公開
(7/1・7/29・10/26・11/25)
通常是非公開となっている郷土館(旧済生館本館)3・4階を見学していただける機会として、特別公開を開催しました。子どもからお年寄りまで、幅広い層の市民からご参加いただきました。

3 寄贈等の受け入れ

今年度は、個人の方から「済生館医学校職員集合写真」、「旧済生館本館解体調査工事資料記録写真」など、山形ロータリークラブ様より、「山形市郷土館環境整備」として敷地内清掃奉仕活動及び環境整備品をご寄贈いただきました。ありがとうございました。

令和6年度 郷土館の事業予定

- (1) 郷土館ナイトミュージアム
(4月・7月・11月・2月開催予定)
(2) 山形市郷土館・郷土資料収蔵所
新収蔵品展(7～8月予定)
(3) 旧済生館本館3・4階特別公開
(4) 山形市郷土館秋季企画展
(10～11月予定)
(5) 山形市文化財成果展(1～2月予定)

各事業の詳細は、「広報やまがた」や「山形市ホームページ」等でお知らせします。

【郷土館事業のお問い合わせ】

山形市 企画調整部 文化創造都市課
文化財係
〒990-8540 山形県山形市旅籠町 2-3-25
TEL：023-641-1212 (内線 626・627)
FAX：023-624-9618
E-mail：bunka@city.yamagata-amagata.lg.jp

※令和3年度より、山形市郷土館は文化創造都市課が所管しています。